

図2 比叡山西南麓に展開する縄文遺跡群

南北5キロ、東西2キロの広がりをもつ比叡山西南麓の複合扇状地上に、10 をこえる縄文遺跡が展開する。細かくみると、遺跡の希薄な地帯をはさんで、北部の遺跡と南部の遺跡に分けることもできる。

表2 比叡山西南麓縄文遺跡の消長

遺跡名		北白川（比叡山西南麓）遺跡群												
		修学院遺跡	沖殿町遺跡	一乗寺向畑町遺跡	北白川上終町遺跡	北白川小倉町遺跡	北白川別当町遺跡	銀閣寺下層遺跡	北白川追分町遺跡	吉田本町遺跡	吉田二本松町遺跡	吉田橋町遺跡	吉田近衛町遺跡	聖護院遺跡
16000年前	草創期								●					
12000年前	早期													
7000年前	前期													
5500年前	中期													
4500年前	後期													
3300年前	晩期													
2500年前	弥生前期													

炭素 14 年代 (校正値)

●有茎尖頭器 ▲住居跡 ▲土器棺墓 ▼配石・集石

比叡山西南麓の縄文遺跡がどの時期に営まれたかをみたもの。太線はまとまった量の遺物が出土している時期。細線は遺物の量がわずかな時期。前期以降になると、後期末晩期初頭の一時的空白期があるものの、遺跡が補完関係をもちつつ、地域全体として連続して遺跡が形成されていることがわかる。縄文集団が場所（遺跡）を移動しつつ、この地域に定着していたことを示している。

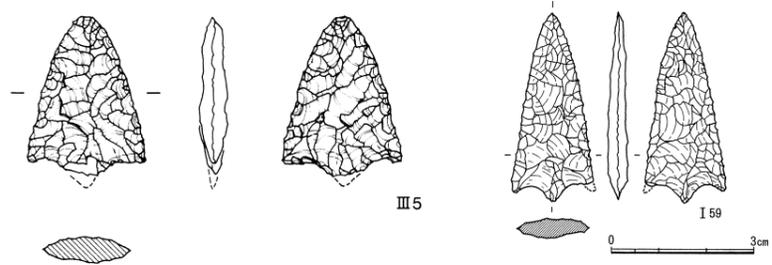


図3 有茎尖頭器(草創期)

吉田本町遺跡(京大本部構内)出土。両例ともにチャート製。左:現存長3.4cm、右:全長4.05cm。

(『京都大学構内遺跡調査研究年報』1993年度・1999年度より)

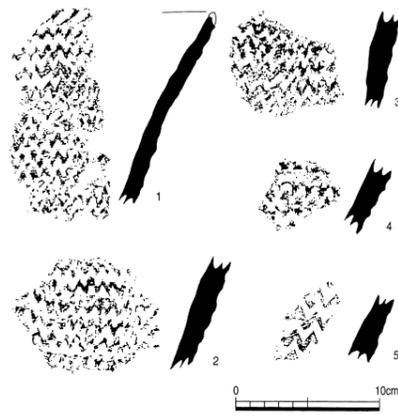
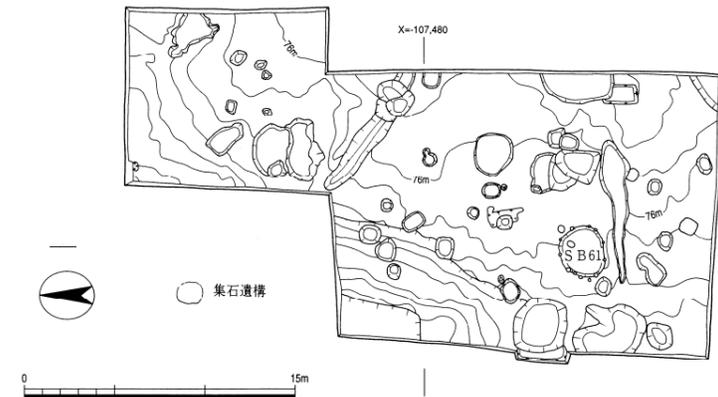


図4 北白川上終町(北白川廃寺下層)遺跡の縄文早期の遺構(左)と住居跡出土土器(右)

住居跡1軒(S B61)と集石土坑8基が見つかった。現在は埋没している、やせ尾根上に営まれており、扇状地の上に立地する前期以降の集落立地とは明確に異なっている。住居跡から出土した土器は、早期の押型文土器(約一万年)。押型文土器の変遷において、山形文が盛行する時期があったことを明らかにした資料である。(『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』より)

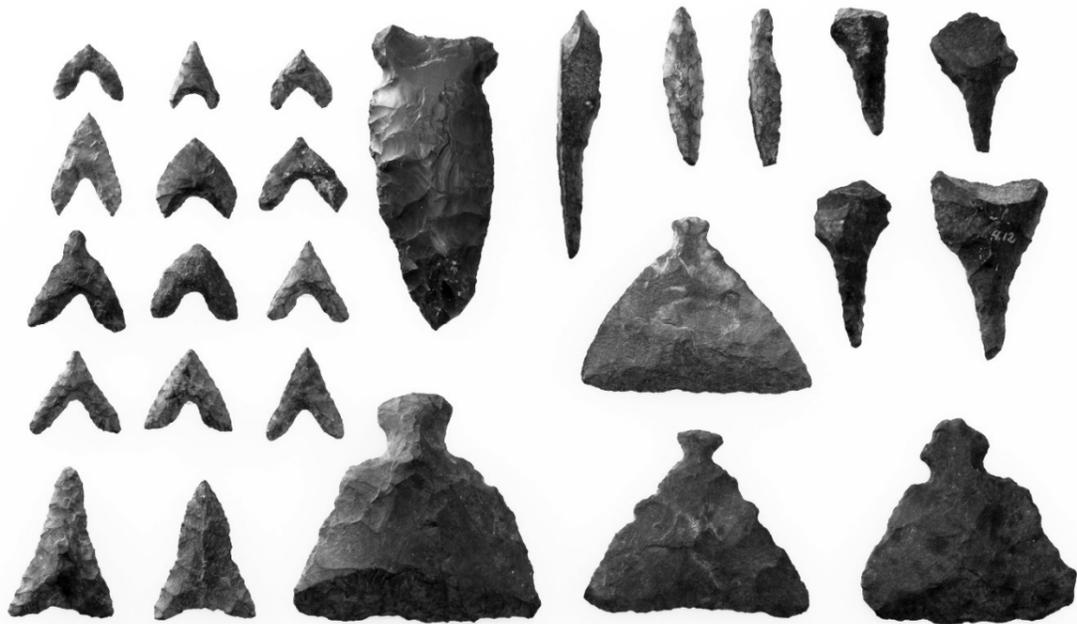


写真4 北白川小倉町遺跡出土の石器

石鏃(左辺)、石錐(右上)、石匙(中央・右下)の類。平面形が整った三角形の石匙は、前期の北白川下層式に伴う特徴的な石器である。縦型の石匙が赤いチャート製であるほかは全てサヌカイト製。このほか、石器製作をうかがわせる大量の剥片類が出土しており、住居は見つかっていないものの、北白川小倉町遺跡は石器製作をおこなった前期のムラとみてよい。

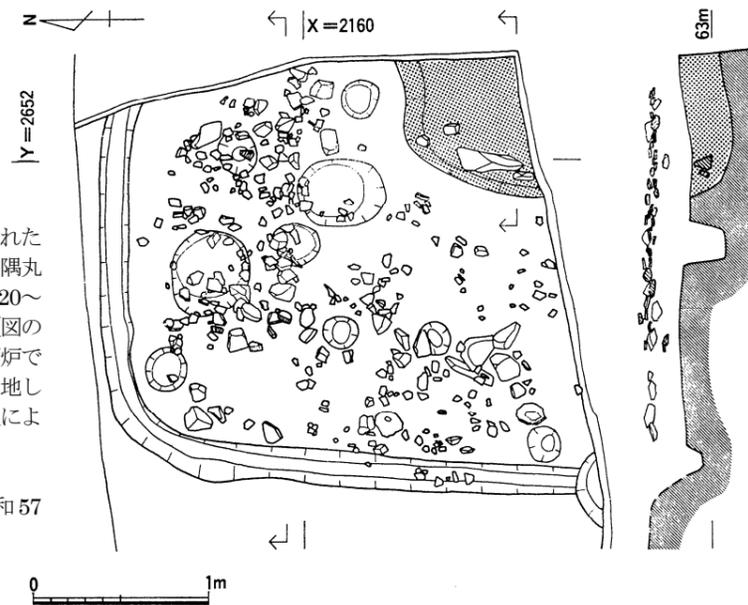


図5 竪穴住居跡(北白川追分町遺跡・縄文中期末)

北白川追分町遺跡で1982年に発見された縄文時代中期末の住居。一辺約5mの隅丸方形の竪穴住居1/4が発掘された。幅20~30cmの周溝をもち、中央に炉をもつ(図の右上隅)。炉辺に焼けた石があり、石囲炉であったようだ。扇状地の微高地上に立地している。石囲炉は、東日本の文化の波及によって、この時期に出現してくる。埋め戻して現地に保存してある。(『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度より)

北白川C式1期																										北白川C式1期	
北白川C式2期																											北白川C式2期
北白川C式3期																											北白川C式3期
北白川C式4期																											北白川C式4期

図6 縄文時代中期末・北白川C式土器の変遷図

北白川C式は、北白川追分町遺跡から出土した土器を基準に設定された土器型式。縄文時代中期末に編年され、4段階の変遷をたどる。それ以前の土器型式が深鉢を中心とした単純な組成で、横方向に文様を展開させる特徴があったのに対して、東日本の加曾利E式の影響を強く受けて成立した本型式は、深鉢・浅鉢・壺などの器形がみられ、縦方向に文様を展開させる。土器作りの系統(伝統)が大きく変化したことがわかる。東日本の文化の影響は土器型式だけではなく、住居型式や打製石斧の出現、遺跡数の急増などからも読み取ることができ、近畿地方において縄文中期末は、大きな文化的画期となっている。(『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ』1985年より)

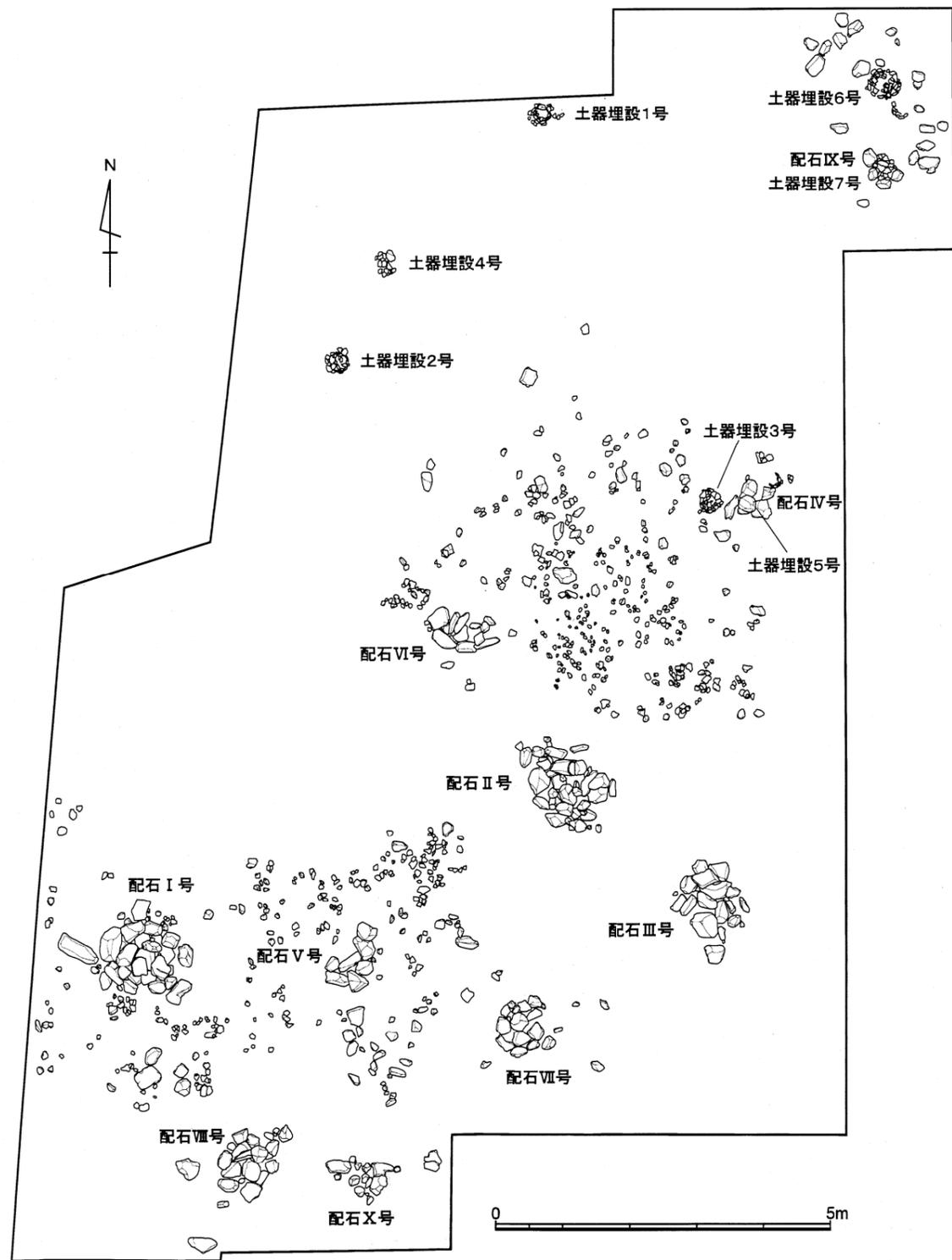


図7 配石・土器埋設遺構（北白川追分町遺跡・縄文後期前葉）

1973・74年の調査で見つかった。後期前葉・北白川上層式1期の配石10基と土器埋設遺構7基が南北17メートル、東西14メートルの狭い範囲に密集していた。配石は南側、土器埋設遺構は北側にかたよる。土器埋設遺構とは、深鉢を土中に埋めた遺構のことで、土器棺と見られる。土器棺が乳幼児埋葬用か、成人の再活用かは不明であるが、配石も含めて墓域あるいは祭域的な性格が強い。多量の土器・石器が出土したほか、土製耳飾りも5点見つかった。遺構の発見地点は、居住には適さない扇状地谷部にあたっている。この遺構を残した集団がどこに住居したのかまだ明らかになっていない。遺構は、北部構内にある理学部植物園内に移築復原してある。

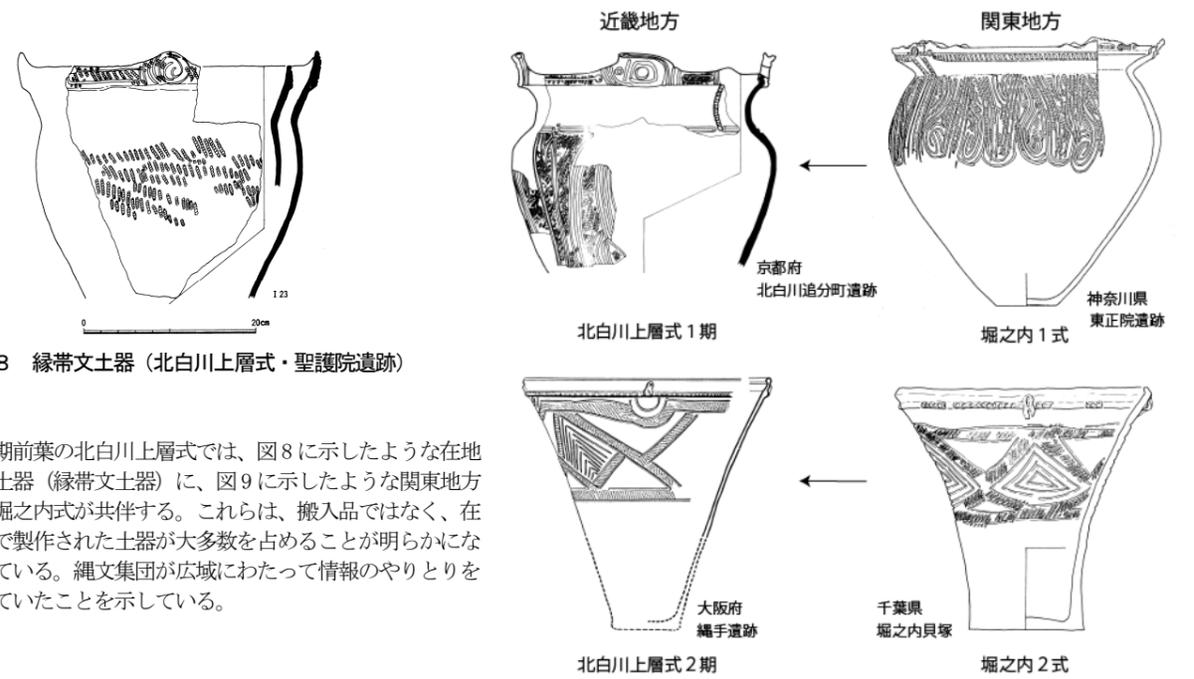


図8 縁帯文土器（北白川上層式・聖護院遺跡）

後期前葉の北白川上層式では、図8に示したような在地の土器（縁帯文土器）に、図9に示したような関東地方の堀之内式が共存する。これらは、搬入品ではなく、在地で製作された土器が大多数を占めることが明らかになっている。縄文集団が広域にわたって情報のやりとりをしていたことを示している。

図9 北白川上層式土器と堀之内式土器

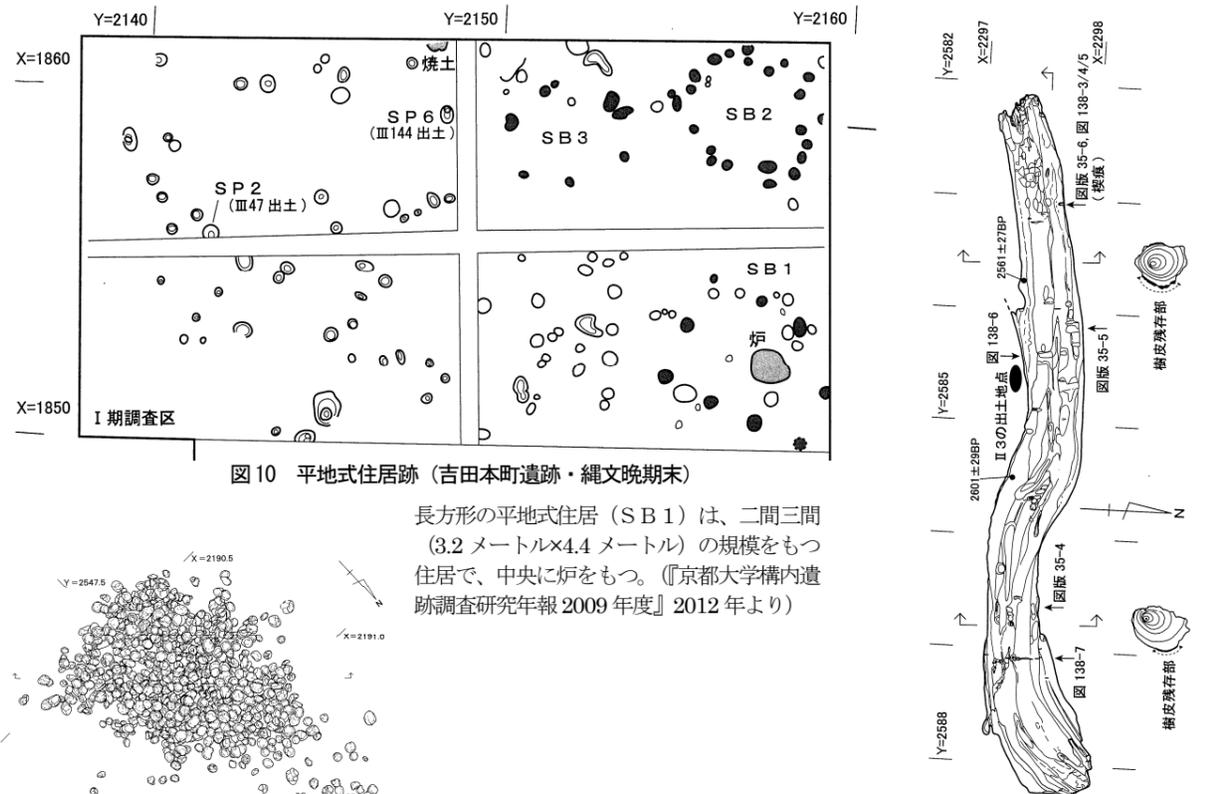


図10 平地式住居跡（吉田本町遺跡・縄文晩期末）

長方形の平地式住居（SB1）は、二間三間（3.2メートル×4.4メートル）の規模をもつ住居で、中央に炉をもつ。（『京都大学構内遺跡調査研究年報2009年度』2012年より）

図11 トチノミの貯蔵穴（北白川追分町遺跡・縄文晩期中葉）

小河川の脇に設置されていた低湿地型の貯蔵穴。約2000個のトチノミが集められていた。貯蔵穴としては最も小さな部類である。（『京都大学構内遺跡調査研究年報1994年度』1998年より）

図12 伐採痕跡のある樹木（北白川追分町遺跡・縄文晩期末）

樹齢およそ140年のブナ科の大木。石斧による伐採の痕跡をもつ。京大総合博物館のロビーに展示中。（『京都大学構内遺跡調査研究年報2009年度』2012年より）